

学校だより 『下稻吉東小学校』

『たくましい子どもたちを育てるために』



一日の始まりはストレッチから

本校では、教育の三本柱「知育、徳育、体育」のほか、人とのかわり方を重視した「技」を教育の柱としてしていることが特徴です。

「技」とは、社会で生きていくための約束やマナーを、子どもたちの活動を通して学ばせるもので、人とのかわり方が中心となります。



校庭での縦割りなわとび

■一日の始まりは、身体と頭のウォーミングアップ

八時五分になると全館に音楽が流れ、体育委員会の児童に合わせ、ストレッチが始まります。(写真上) 身体を自覚めさせ規律ある落ち着いた時間で一日が始まります。

■人との関わりの中で、大切なことを身に付ける

全員が校庭で遊ぶ時間がありません。この時間は、一年生から六年生まで同じグループになり、異なった学年の子どもたちと遊びながら、さまざまな経験ができます。おかげで、休み時間の校庭は、元気な子どもたちでいっぱい입니다。



運動会バトン

■自分を輝かせるために

小学校ですが、部活動がとても盛んです。参加しているのは、四年生以上で、合唱部四十七人、ブラスバンド部四十六人、バトン部五十三人が活動しています。昼休みや放課後、夏休みの練習を通して、自分たちの技に磨きをかけました。コンクールや運動会、集会などで積極的に発表します。

六年生になると、総合学習の一つとして、経済の仕組みを知る会社づくりがあります。商品の生産から販売まで、自分たちの力で行ないます。もちろん、うまくいくとは限りません。失敗を重ねながらたくましく成長していくことを期待しています。



手作り品販売会

歴史探訪

《かすみがうら市人物列伝》

長谷川茂造



長谷川茂造



作付面積・収穫量ともに全国一位を誇る茨城の栗。茨城県の中央部(かすみがうら市・岩間町・友部町・美野里町など)で、全国約三十パーセントのシェアを誇っています。この栗を本格的に栽培し、栗市場を拡大させるきっかけをつくった人物が、下志筑の長谷川茂造です。

長谷川茂造は、嘉永五年(一八五二)に中佐谷村の久保田家の二男として生まれ、明治四年(一八七二)に下志筑の長谷川家に養子に入りました。茂造は、ある日自宅庭先にあった、二本の山栗の実を

拾い集め、反当収入を計算してみました。すると拾った栗は重さ二百七十貫となり、当時の栗一貫目が十銭から二十銭という相場でしたので、栗を畑で栽培し売り出すと、反当二十七円から五十四円という計算になります。明治三十一年当時の米一俵の値段が三円二十八銭といわれていましたので、栗畑一反で米九俵から十八俵に相当する収入が得られることに気づきました。茂造は、早速埼玉県安行(川口市)の植木業者に栗苗木を注文し、屋敷前の山林を開墾して植えました。

その後、茂造は栗毛虫の防除研究などを行ない、本格的に栗栽培を実施していきます。茂造の栗栽培が注目されるようになり、大正末期には志筑・新治・七会には四万五千本から五万本(約六十ヘクタール)に増加していきました。

文芸ひろば

俳句

札所へと坂道長し藪柑子
冬天を青く透かして撫大樹
朝霧の消えてつらなる紅葉山
師の遺句にまみえし里の走り蕎麦
触るるほど落日透けて枯木立
ふところに雲一つ抱き初筑波
若水を一気飲みして深呼吸
三日はや見様見真似の治部煮かな
冬天に古からぬ家壊さるる

桜井筑蛙 (中志筑)
石平周蛙 (市川)
大西周 (稲吉東)
江崎慶子 (稲吉東)
石塚文子 (牛渡下郷)
市原美代 (土浦市)
小松崎正栄 (戸崎)
松葉ふみ (内加茂)
塚田甲子郎 (下稻吉)

短歌

類なでてやさしき風の過ぎてゆく小豆の莢実むく午後の庭
よべの雨あがりてすがし庭先にちろの鳴く音しらつゆの蔭
宴果て居待月照る東京の街路樹を吹く風のやさしさ
秋風に幟はためき笛太鼓に合せて踊る子等の手拍子
チェンソーに枝を切るる櫛の木の悲鳴に似たる音の響かふ
赤とんぼ来て指先に止まりけり小春日和の夕べさみしき
木枯らしの落葉を散らす山坂は老いには厳し慣れし散歩も
ひと夏の役目終えたる水門に冬の日差しはあたたかく照る
わが畑の細く曲がりし葱とりてぬたにして知る甘さ柔らかさ

宮本和子(中佐谷)
目黒しづ子(稲吉東)
大西周(稲吉東)
田中好子(下稻吉)
佐藤千代(宍倉)
坂入昭吉(牛渡)
鈴木春雄(戸崎)
前嶋武(上土田)
前島和子(雪入)